まちのNEWSスクランブル

小平ふるさと村で昭和30年代の結婚式を再現

11月3日、小平ふるさと村内の旧神山家住宅主屋で、小平地域で昭和30年代まで自宅で行われていた結婚式をそのまま再現した、本物の結婚式が行われました。市文化振興財団が6月にカップルを公募し、応募4組の中から同市小川町の会社員佐藤雅樹さん（38）、藤橋成江（のりえ）さん（32）が選ばれました。その親族の方々も列席して、昭和にタイムスリップしたかのような結婚式。市内在住の落語家三遊亭右紋さんが「相伴当（しょうばんとう）」と呼ばれる司会役を務めました。

仲人は両家からそれぞれ夫婦1組ずつ出て上座につき、花嫁と花婿は中ほどに対面して座ります。仲人挨拶の後に親族固めの盃。そして三三九度の盃。「雄蝶（おちょう）」「雌蝶（めちょう）」と呼ばれる、晴れ着姿の親戚の男の子と女の子が三段重ねの組み盃に代わる代わる冷酒を注ぐ。この時に雄蝶、雌蝶は燭台のまわりを8の字を描くように回るのがこの頃の習わしで、子どもたちの緊張した所作が微笑ましく、厳粛な中にも和やかな雰囲気が漂いました。

上・昭和30年代そのままに座敷での婚礼
左・式を終えて、晴れ晴れしい新郎新婦

宴席が始まると、「高砂」が朗々と謡われ、鈴木ばやし保存会から獅子舞がお祝いの舞を披露。料理を出すのはふるさと村やルネこだいらの女性職員さんたち。白い割烹着姿で大わらわでした。本膳として「小平糧うどん」が出されましたが、これは「つるつるかめかめ」の縁起をかついで振る舞われていたからだとか。

公開で行われたため、屋外で見物中の70代女性は「懐かしい。私たちの世代がこういう結婚式をした最後かもしれません。昔は朝まで宴会が続いたものでしたよ」とにっこり。

主賓の小林小平市長に婚姻届を提出。市から小平特産のブルーベリーワイン等が贈られ、めでたくお開きになりました。

ふるさと村が縁結びの場所だったという、新郎の佐藤さんは「想像していた以上の式でした。ふるさと村でできたことは一生の宝です」と感激の面持ち。秋の陽がさす茅葺き屋根に紋付き袴と文金高島田が映えて、清々しい日本の花婿花嫁でした。

ヘアーサロン「BB.つばめ」が企画した西武電車貸切ツアー大盛況

オーナー似顔絵ロゴのヘッドマークをつけた貸切電車

鉄道ファンが集う清瀬市の床屋「BB、つばめ」は開業6周年企画として、10月23日「西武線101系で行く横瀬車両基地見学ツアー」を開催。参加者は老若男女あわせて211人。近隣だけでなく筑波から参加の人も。清瀬駅発着で、黄色の車両、4両を貸し切ってのツアー。BBつばめのオーナー、渡辺和博さんが、「地元の鉄道を貸し切って乗ってみたい」という願いから西武鉄道本社に交渉して実現させました。

渡辺さんはいつも駅員の帽子とシャツ姿の〝駅長〟床屋さん。店内には旧型客車の座席や古い行き先案内板やありとあらゆる鉄道グッズが満載、鉄ちゃん（鉄道ファン）には有名な店なのです。毎年さまざまな「つばめツアー」を企画し、お客さんや仲間と「乗り鉄」を楽しんでいます。

この日の運転手さんと渡辺さん

ヘッドマークにBBつばめのロゴマークをつけた電車は途中、吾野駅に20分停車して、トイレ休憩と撮影タイム。これも貸切ならでは。「つばめ弁当」も配られ、車内は和気あいあい。横瀬車両基地では、かつて西武鉄道で活躍した保存車両を貸切見学。復路の車内ではちびっこ車掌体験とお楽しみ抽選会もあり、鉄道グッズが当たって大喜びの人も。

「いつも乗っている電車にこういう楽しみ方もあるんだね」と車窓の風景も楽しみつつ、参加者同士の交流も深まった1日でした。「子どもたちが自ら、運転手さんに『ありがとう』とお礼を言ってくれたことがうれしかった。これからも楽しいことを皆さんで共有していきたい」と渡辺さん。

春休みには子どもたち対象に、小田急ロマンスカーの展望車貸切ツアーを企画中。小田原でかまぼこ作り体験をするそうです。

お鍋を通して、石巻の商店街を支援「まきくる」

「まきくる」とは宮城県石巻市の「まき」と東久留米市の「くる」を組み合わせたもの。東久留米を中心とした店や農家、病院、個人などが、東日本大震災の被災地を応援したいという思いを共有した集まりで、さまざまなことに取り組んでいます。

7月から始まった「お鍋をもらってことぶき町通り商店街にあかりをともそう」プロジェクトは、石巻市ことぶき通り商店街が、取引先から鍋5000セットを寄付されたことから始まりました。その鍋を商店街の復興に役立たせたいと、石巻に友人がいる東久留米の農家の方を通して、まきくるが1300セットを預かりました。

上）支援金へのプレゼント シリコンスチーマーと蒸し器にもなる超耐熱ガラス鍋

右）「まきくる」のシンボルマーク

1口3千円の支援金でシリコンスチーマーとフランス製超耐熱ガラス鍋の2個をプレゼント。3千円全額をことぶき町通り商店街へ寄付。支援金のみで鍋不要の場合には鍋は仮設住宅へ届けるというプロジェクト。のりなどの東北物産も販売支援している、市内のカフェやベーカリーなどで鍋を取り扱い、花を扱う「aju」の岡本恵美子さんが商店街との窓口になりました。バザーなどのイベントで呼びかけ、口こみでも広まり11月で鍋の個数が終了。トータル350万円以上の支援金を商店街へ寄付することができました。

「11月初めに石巻の商店街へ行ってきましたが、復興が進んでいるとはいえ、まだまだ人通りは少なく、信号機も機能していない状況です。同じ商店同士として、これからも東久留米の商店が被災地支援という共通の目的でつながり、商店街応援を続けていけたらいいと思います」と岡本さん。

岡本恵美子さんは仲間と被災地へ花のプランターを届ける支援もしています。

世代をこえた、地域の居場所
コミュニティカフェ「仙人の家」

東伏見の住宅街の中に、この5月「仙人の家」というコミュニティカフェがオープン。竹中秀二さん、美恵子さん夫妻が自宅1階をリフォームし、異世代交流の場として、地域の人々に自由に利用してもらおうと開いたもの。「仙人の家」とは竹中さんが白ひげをたくわた仙人のような風貌から、知人が名付けたそうです。高齢者や身障者にやさしいバリアフリーのトイレ、フロアーは床暖房。その上、コーヒー150円、日本茶（ティーパック）50円という安さ。ボランティア3名が交代で店のサポート。平日夜間、週末はグループや活動団体のミーティング等に時間貸しされています。

竹中さん夫妻は13年前に西東京から長野県姫木平に移住し、自然を通して人々が交流する「どんぐりむら多世代交流ハウス」と呼ぶ山の家をつくっていました。二人とも70代後半になったこともあり、山の家はそのままにして、生活拠点を元の西東京に戻しました。「どうせ戻るのなら、地域に恩返ししたい」という気持ちからここを始めたのです。

取材中も、不要になった革バッグを財布にリサイクルして、手縫い中の近所の男性や人形劇をやっている手作り上手なママさんがやってきます。「いろんな方との出会いがあって、私自身がどんどん楽しくなっています」と美恵子さん。「いい人たちがいっぱいいて、寄ってたかって（?）助けてくれます。世の中捨てたもんじゃない。家に引きこもりがちなお年寄り、定年世代の方もここをたまり場としてほしい。皆で支え合っていきたいですね」と秀二さん。今後は共通の趣味である機織りのワークショップや山の家の活用なども実施したい、と抱負を語る夫妻です。オープン半年にして「仙人の家」は地域コミュニティの核になっているようです。

竹中夫妻が手づくりの織機で織りをみせてくれました。

仙人の家
西東京市東伏見5－9－6
☎042（461）2365

豊島屋酒造の「酒蔵一般開放」
今年も大賑わい

「金婚」の銘柄で知られる東村山市の豊島屋酒造（株）で11月20日、恒例の「酒蔵一般開放」が開催されました。今年で13回目、毎年3千人から5千人もの人出で人気のイベント。今年も酒蔵見学や酒試飲、出店、ケーナの演奏やお囃子などで大賑わいでした。

中でも無料試飲コーナーは大人気。ここでしか飲めない「限定酒」には長い列ができていました。しぼりたての「瓶口」を味わっていた、若い男性は「地元でつくられている酒だからこそ、地元でのみたいですから」と毎年楽しみに参加しているとか。家族連れや女性が多いのも特徴です。

甘酒と綿菓子は無料サービス。焼きとりや焼きそば、おでんなどは酒販組合青年部の協力です。樽酒などの有料試飲、商品の直売もあり、休憩テント内はミニ宴席の輪がぎっしりで溢れんばかり。お祭り気分で盛り上がっていました。

「蔵の見学希望者が多いのですが、予約が要るので、どなたでもフリーで入れる日を設けたいとこの開放日を始めました。ケーナを演奏しているのは、ウチの杜氏なんですよ」と同社副社長の田中良彦さん。ステージ上ではこの杜氏さんが中心となり軽やかなフォルクローレを披露。

純米大吟醸「利他」には「売上金全額を震災孤児支援に使う」旨の張り紙がありました。老舗酒蔵が催す地域との交流イベントは、笑顔に満ちる晩秋の風物詩です。

上）試飲の行列がそこここに
左）ラッシュ並みの大賑わい